

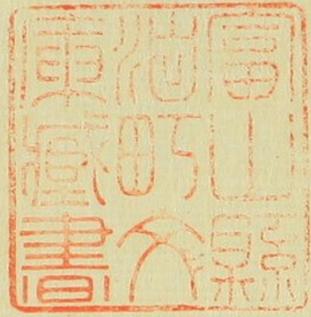


書首

源氏物語

三十一





二十三

河卷名 年月をねまひつれてゆらんよきふうの初ねさうせよ
花以哥并詞為卷名 係氏三十六歳の正月の正月の巻は翌年のまるれ
豎の並ましくし
細行業巻まで月次よりきり

○年立りつ 河わす玉のし 立るるわすよりきり
あまのいさかひのこゝろ
細 正月朔日は成れば冬の空ひささくも也元日
立春ちるし
○くどるるの河拾遺野へたれは若菜つとさうむ
るしそくこの草も春のこゝろ
細六条院といふとまの公界といふ
○いつつと花古今うを足らふのめも春は雪
ゆきハ花をさ里も花をさうきり

○まていといと花 朗詠早春詩云庭増春色也
晴淑録まていと云初ハ上のねるゝの垣ねのうら
まよりまていといと也今云初ハ六条院のわらさる也
細六条院也平生さくまをつとくゝの殿のうら
まふまていといと始ハ翠簾さくまの物のまてい
つとくひては春わら也

○春の初とれ 細三候よりさ分也 春端は春の
初の惣別乃さるといひてまをさるねれ内とい

さくまの初とれ 細三候よりさ分也 春端は春の
初の惣別乃さるといひてまをさるねれ内とい

てうんいんるも君のけい... 私のでい何いふれ...

○くまのり 孟 礼者也

○さんご 細糸賀也花散里... とて方くありこほ也

○きんごの 細齒固也或抄ほ氏の初也

○うまの 細紫上へほ氏の糸賀... 又抄入まてまのせほ人こ也

Handwritten Japanese text in cursive style, likely a transcription of the text above.

いんいんえん

○うと氷房 ほ氏也河水池如被鏡... 僧達定 柳似舞腰池如鏡 白氏文集

○何るま 細草子地也ほ氏と紫上とのいあひ

○きんごの目 細元日子月也

○きんごの年乃花 朗詠子目云倚松根... 年之翠満年菅家拾遺... のひよはまもよとをいへくせれ藤惟賢

Handwritten Japanese text in cursive style, likely a transcription of the text above.

くんとさすと評して心とつきてススし
。隻の山住の細花散里也
。時々の細隻のうらな也

。まこととあはれとさうとさうとつや也
。あてやうは益貴字也かめら心也上臈く
。まを好也貞女の半年月てても不妻也花散
里の心と本まうさう也

。らうやうやう細一宿のうら也

。まこととあはれとさうとさうとつや也
。あてやうは益貴字也かめら心也上臈く
。まを好也貞女の半年月てても不妻也花散
里の心と本まうさう也

。まこととあはれとさうとさうとつや也
。あてやうは益貴字也かめら心也上臈く
。まを好也貞女の半年月てても不妻也花散
里の心と本まうさう也

。花田ハ花 花散里ハ年の内ハ淺花田の海賦の
文のさぬを送りけりさハそれとさぬ也是より下れ
ゆらぐも皆流氏のうらなとつやとさぬ也
。あてやうは益貴字也かめら心也上臈く
。まを好也貞女の半年月てても不妻也花散
里の心と本まうさう也

。やうさ花 花散里ハ年の内ハ淺花田の海賦の
文のさぬを送りけりさハそれとさぬ也是より下れ
ゆらぐも皆流氏のうらなとつやとさぬ也
。あてやうは益貴字也かめら心也上臈く
。まを好也貞女の半年月てても不妻也花散
里の心と本まうさう也

。花田ハ花 花散里ハ年の内ハ淺花田の海賦の
文のさぬを送りけりさハそれとさぬ也是より下れ
ゆらぐも皆流氏のうらなとつやとさぬ也
。あてやうは益貴字也かめら心也上臈く
。まを好也貞女の半年月てても不妻也花散
里の心と本まうさう也

。人の心ハ細花散里の心也何とつやとさぬ也
。あてやうは益貴字也かめら心也上臈く
。まを好也貞女の半年月てても不妻也花散
里の心と本まうさう也

くごうくごあちちのうらな
とらん好くびとさうとつやとさぬ也
。あてやうは益貴字也かめら心也上臈く
。まを好也貞女の半年月てても不妻也花散
里の心と本まうさう也

。あてやうは益貴字也かめら心也上臈く
。まを好也貞女の半年月てても不妻也花散
里の心と本まうさう也

かろしきよと 万水とのかくしとくろくろく
中にも未つひに宮をわたりしを心してあり
くひねと也 或は ぼ氏の心也

○我ふふといと 細ぼ氏の仁怒あり也
万水 ぼ氏の又くろくろくしてありありありあり
きとおろせにあらんとありありありあり也

○あつとりの 細ぼ氏のよひね也

○あつとりの 細ぼ氏のよひね也
花よりくろくの染にあら物のかあらあり

かろしきよと 万水とのかくしとくろくろく
中にも未つひに宮をわたりしを心してあり
くひねと也 或は ぼ氏の心也
○我ふふといと 細ぼ氏の仁怒あり也
万水 ぼ氏の又くろくろくしてありありありあり
きとおろせにあらんとありありありあり也
○あつとりの 細ぼ氏のよひね也
○あつとりの 細ぼ氏のよひね也
花よりくろくの染にあら物のかあらあり

かろしきよと 万水とのかくしとくろくろく
中にも未つひに宮をわたりしを心してあり
くひねと也 或は ぼ氏の心也
○我ふふといと 細ぼ氏の仁怒あり也
万水 ぼ氏の又くろくろくしてありありありあり
きとおろせにあらんとありありありあり也
○あつとりの 細ぼ氏のよひね也
○あつとりの 細ぼ氏のよひね也
花よりくろくの染にあら物のかあらあり

おちりの人く、巴抄 源氏のゆききりて也

○一ノ男踏哥 河踏哥 監錫持 未摘花卷 下略
花 正月十六日の筈會を、女踏哥と云舞姫と云
出故也男踏哥ハ十四日也殿上地下の四位以下は筆
可然取と云りて催馬赤と云ひまひのつら
わり是昔正月十四五日ハ京中の遊士月ハ兼て
わりのこゝろと云りてこゝろ舞と云るを
未の代ハ千秋万歳といひて逸興と催と云りて
是ホレ余風也因離院天元六年正月男踏哥あり
其後ハ記録あると云見りてその義式ハ四宮抄
といふ書ハ見たり
取抄踏哥役者廿二人あり延喜踏哥圖見花鳥

かきつるはなをのこゝろ
りてまゝのこゝろを
つと人のかきつるはなを
まゝのこゝろを
けりてまゝのこゝろを
えりてまゝのこゝろを
おとてまゝのこゝろを
花院まゝのこゝろを
よまゝのこゝろを
おわをまゝのこゝろを
くろかゝまゝのこゝろを
とまゝのこゝろを

○此おまハ或抄 六条院也源氏諸翁と云
はつらゆハ皆心つくしせり也
雨くく、或抄 花散里玉くくも也

○左右の花 霞殿の東對西對又左ハこのま
はつらゆハ皆心つくしせり也
雨くく、或抄 花散里玉くくも也

○このまの姫君 細ありの姫君也
うへもひとよハ或抄 此上も明石姫公と云
よかこくまもゆハ玉くくもあひは也

初音

なまゝのこゝろを
らりてまゝのこゝろを
おりてまゝのこゝろを
いとまゝのこゝろを
くまゝのこゝろを
おしてまゝのこゝろを
たをりてまゝのこゝろを
つらひてまゝのこゝろを
まゝのこゝろを
まゝのこゝろを
まゝのこゝろを
まゝのこゝろを

末

和琴の袋の箏より同じ或記は和琴の袋より唐
錦と不可用和国より出来より器より故とより
笛の袋箏の袋と可有也衣笠前内府の雑物
とより

